

## 朝鮮通信使の饗応について

—大坂における饗応—

高正晴子（梅花短大）

〔目的〕 江戸時代に朝鮮からの親善使節としての朝鮮通信使が12回来日したが、1回目から11回目までは大坂を経て、江戸まで(2回目は伏見まで)を往復した。朝鮮から通信使船で大坂に着いた一行は、川口で船を乗り換え淀まで遡上し、そこから陸路江戸に向かった。大坂ではこれらの通信使一行を迎えて日本料理で饗応し、食料の調達も行ったが、一行の内通信使船とともに大坂に留まった一部の者に対し、引き続いて残留期間の食料の調達を行った。これら通信使への饗応や食料調達について調査し、大坂における饗応を明らかにすることを目的として本研究を行った。

〔方法〕 慶應義塾大学図書館所蔵の『宗家記録』を資料として、大坂における饗応を明らかにした。また大坂における饗応の特色を明らかにするために、『通航一覽』その他の通信使関係文書を資料とした。

〔結果〕 『宗家記録』には、7回目の天和度(1682年)以降の記録が記載されているが、そのうち、大坂における御馳走の献立は、天和度・正徳度(1711年)・享保度(1719年)・延享度(1748年)・宝暦度(1764年)の記録に、彼らの好みのための自炊の食料の調達は天和度・正徳度の記録に記載されている。天和度、正徳度ともに最高位の三使・上々官の献立は七五三引替膳であったが、享保度は簡略な御馳走が記載されているのみであった。延享度には七五三引替なしの御馳走で、宝暦度になると三使衆よりの希望により簡単な御馳走が饗されたのみである。このように御馳走の献立は年代につれ次第に簡略化されたが、饗応や調達食品は品目数量ともに莫大なものであった。ちなみに、正徳度には紀伊徳川家から特産の塩鯨や塩鹿が贈られたという記録もある。調達食品については目下検討中である。